

四教と三諦円融 —法華經こそ眞実円融の法—

天台大師は釈尊の説法を五時八教によって判釈はんじゃくしました。この五時八教の八教は、大きく二つに分けられます。説法の形式によって分類したものを化儀けぎの四教とんぜんひみつ（頓・漸・秘密・不定ふじょう）と言いい、内容・教理の面から分類したものを化法けほうの四教ぞうつうべつえん（蔵・通・別・円）と言いいます。これらは薬の調合の仕方（化儀）と薬味（化法）に譬えられます。

私たち衆生が様々な迷いを生じて悪道しずに沈ぼんむのは、煩惱ぼんのうという妄心もうしんによって眞理である空・仮・中の三諦さんたいに迷うからであり、釈尊が仏教を説かれたのも、三諦の原理によって人々を救おうとされたからです。

しかし、仏の悟りである三諦の理は実に難解なので、釈尊は方便もちを用いたり、あるいは眞理を頓ただちに説き示したり（頓）、浅い所から深い所へと漸次ぜんじに説いたり（漸）、また衆生の根力けんろふじょうきょうに従って顕露不定教けんろふじょうきょうを説いたり（不定）、同じ法座たどにいながら聞く者によって説法の内容が異なるというような、他の者がどのような説法を聞いているのかを判らないように個々に対して法を説く秘密不定教ひみつふじょうきょう（秘密）を用いたりしたのです。

これらの手段によって説かれた四教について説明してみましよう。

蔵教

蔵とは、經・律・論の三蔵を意味します。竜樹菩薩りゅうじゅぼさつが『大智度論』で大乘だいぢに対する小乗しょうじょうを三蔵と論じ、また法華經『安樂行品』にも「小乗しょうじょうに貪著とんじゃくする三蔵の学者」とあるところから、小乗の教えを蔵教ぞうきょうと言うようになりました。

ここでは、見思けんじの二惑が眞理としての空理おほを蔽おほい隠す煩惱よくかいであるとして、欲界・色界・無色界むしきかいの三界六道さんがいりくどうの因果いんがを説き、声聞しょうもんには四諦えんがくの法、縁覚いんねんには十二因縁ぼきつ、菩薩ろくには六波羅蜜はらみつという修行によって三界から解脱する空理を悟ることが究竟くきょうの涅槃ねはんであると説きます。

蔵教では、衆生個々を含め、三界の諸法はことごとく因縁離合りごうの力によって生滅しょうめつするものであると説きます。その実体は本来、「苦・空・無常・無我くくうむじょうむが」なのですが、衆生はみだりに実我実性じつがじつじょうがあると執着するために、得ては喜び、失っては悲しみ、いつも煩惱を起こして妄業もうごうを作り、その結果、未来に苦果くくわを招いてしまうのです。ですからその一つ一つを分析して、最終的に空を觀ずるという析空觀しゃくくわんを修行すれば、煩惱を断じ除くことができると説くのです。

しかし、このような空は現実を否定する空の偏たんくうのみの教えであることから但空たんくうともいいい、他の仮・中の諦理との間に繋つながりがない偏かたよった空理、すなわち偏空へんくうの教えとされています。

通 教

通とは、空の理が前の蔵教と所詮は同じであることから通同、また後の高度な別教・円教に通じているので通入と言い、そこから通教と言います。

ここでは、蔵教と違って直ちに道理を基礎として見た空理を立てます。すなわち因縁即空・無生無滅の法理によって、万有の諸法とは直ちに空であることを説くのです。これを体空と言います。

しかし、また当体即空と説く当体には、凡夫の主観を基にして生じた相を一端は認めておいて、それを通教の教理によって三界の諸法はそのまま即空であり、無生無滅であるとするのです。故に、そこには自ずと有の存在を含んでいるということになり、これを蔵教の但空に対して不但空と言います。

通教では、二乗や鈍根の菩薩は灰身滅智と言って、煩惱の源となる自分の身を灰にする無余涅槃を最高の境地としますが、利根の菩薩は、さらにこの空理の中に深く含まれている中道の理を見出だして、後の高度な別教・円教の悟りにも通入します。これを被接と言います。

別 教

別教の別とは、先の蔵通二教とも後の円教とも異なるという意味です。

ここでは、ただ空理だけを明かすのではなく、広く空仮中の三諦を明かし、さらに三界六道の外（界外）の因縁の相をも明かして、菩薩が仏果をめざして進む長期の修行の因果を説きます。

しかし、この三諦は隔歴三諦と言われます。空諦・仮諦はそれぞれ別々のものであり、真如である中道も、空仮の二辺を離れた但なる中であるところから但中と言われ、教えの上では先の通教と共に方便説を帯びた権大乘の分域を脱することができません。したがって、その修行方法も次第三観・隔歴三観が説かれます。

ところが、実際にこれに従い、空観・仮観と隔歴の修行を積み、中道観を修行する初地という位にまで登ると、そこには別教で説かれる但中の理（空諦でも仮諦でもない純淨無垢な真如中道）が現われるのではなく、自然と円教の教理の中へ入っていくことになります。このように初地以上の位の人が円教の人となり、現実には修行者がいなくなってしまうことを有教無人と言います。

円 教

円とは、偏ることがない完全なものという意味です。

別教の説では、真如と現象界とを純淨無垢と無明妄染とにはっきりと分けていますから、修行も次第・隔歴して真如中道を求めることになります。

しかし、円教では真如中道の理に、本来宇宙法界の万有の本性を具し、常に一体不二であって、そのどちらかが先に現われたり後に帰入するというものではないので不縦と

言い、またことごとくが真如以外のものではないから不横ふおうと言います。

また空仮中の三諦円融は、法体ほつたいに別なく隔たりなく、しかも凡夫の思議が及ぶところではない故に円妙と言い、もとより諸法を具そなえて欠けるところがないので円満と言い、一法に万法を収めるので円足と言い、先後の別なく次第に経て修行成就するものではないので円頓えんどんと称されます。

さらに智円ちえんと言って一切智いっさいち・道種智どうしゆち・一切種智いっさいしゆちの三智の相が一体であることや、行円ぎょうえんと言って一行そくいっさいぎょうは即一切行であること、位円いえんと言って初位そつゐに一切位の功德があることなどが説かれ、不偏の円理、即空即仮即中、中道即一切法の理が明かされるのです。

このように円教では真理を説き示す教相法門の全面えんゆうに「円融」という思想が徹底され、修行の面における観心門においても「円頓」と言って、一心三觀の妙修が説かれます。ここに至って初めて、仏の悟りは煩惱即菩提、生死即涅槃、娑婆即寂光の妙理であることが示されるのです。

真の円教

爾前にぜんの円と、法華の円との相違について、天台大師は三種の教相を明かす中に、約教・約部の法門として示しています。

すなわち約教・約部の両時ぜんさんいそに前三ごいち為い籠みょう・後一ごいち為い妙ありとして、約教の時は蔵・通・別の三教は方便の教えであり、円教のみが真実の教えであるとしています。これは今まで述べてきた四教の内容そのままの意味です。また、約部とは、五時判けごんぶに配して勝劣を判断する立場ほうどうぶですから、華嚴部には別円二教が説かれ、方等部には蔵通別円の四教が説かれ、般若部はんによぶにも通別円の三教が説かれているのです。

しかし、法華経の円と比べたときに、法華経以前の三教（華嚴・方等・般若）は方便の教えを帯した円であり、後の一教（法華経）のみ純円一実の教であると厳格に判ぜられています。つまり、三諦円融の法門は、法華経が説かれて初めて真実のものとなるのです。

天台大師はこの法華経によって理の一念三千の法門を示し、大聖人は末法の御本仏として、その本門『寿量品』の文底に秘沈された妙法を事行の一念三千たる本門戒壇の大御本尊として御建立されたのです。

私たちはこの御本尊をひたすら受持信行するところに、自ずと三諦円融の妙理を体得し健全な人生を歩むことができるのです。